

# 深川の開発と支配

江東区深川江戸資料館

## 1. 開発者・深川八郎右衛門

森下1丁目の深川神明宮。ここは今から約4百年前の慶長元年（1596）に創建された神社です。この神社を創建したのが、「深川」の開発者の一人、深川八郎右衛門でした。

当時の江戸は、豊臣秀吉による天下統一後（1590年）に徳川家康が関八州を秀吉から与えられ、自らの領国支配の本拠地となったばかりの頃でした。

八郎右衛門は、摂津国（大阪・兵庫の一部）の出身といわれ、徳川氏の本拠地としての都市作りが期待される江戸にやってきた土地開発者の一人とみられます。その八郎右衛門らによって、深川神明宮の周辺が開拓され、「深川村」の名が付けられました。

## 2. 小名木川の開削

深川北部から亀戸・大島の間を流れる小名木川も、江戸幕府成立以前に開削された運河です。

天正18年（1590）に家康が江戸に入って最初に開いた運河が、この小名木川でした。その目的は、当時行徳で生産されていた塩を、直接江戸城に運びこむため、行徳から小名木川を通り隅田川を越えて、道三堀どうさんぼりに入って江戸城へと運ばれました。

小名木川という名の由来は、開削にあたった代官が小名木四郎兵衛だったという説（たしかに大島には小名木村という村が小名木川に沿って存在していました）や、この付近でウナギが獲れたことから「ウナギ沢」と呼ばれていたからという説などがあります。江戸幕府開設前後の小名木川南岸はすぐに海岸が迫っており、大小の島々が点在するといった状況でした。

## 3. 深川獵師町

小名木川の南方で、隅田川の沿岸部付近は、自然堤防のように、陸地が舌状に突き出ていました。



「深川大わたし」（江戸雀）永代橋ができる前の渡し。その付近に寛永6年（1629）、深川獵師町が誕生しました。獵師町は8ヵ町にわかれ、当初は開発者たちの名前が、そのまま町の名前となっていました。

そうした町のひとつ、相川町（永代1、2丁目と佐賀1丁目の一部）の名主をしていた相川新兵衛が代々書き残した記録『寛永録』によれば、

獵師町之義は、寛永六巳年しよよけつみ夕除堤ひがた之外干潟之処町場に取り立て申したき旨、治郎兵衛・藤右衛門・新兵衛・理左衛門・彦左衛門・助右衛門・助十郎・弥兵衛八人之者、（伊奈）半十郎様へ願ひ奉り、

『寛永録』第1巻（江東区教育委員会）

と関東郡代・伊奈氏を通じて幕府に獵師町として居住できるよう願ひ出ました。この申請は認められ、代わりに「御菜御肴」（魚介類のこと）を年に36回献上することが義務づけられました。

これにより、江戸湾に浮かぶ佃島とともに、深川は江戸前漁業を担う地域ともなったのです。

#### 4. 富岡八幡宮の造営

富岡八幡宮の周辺は、小名木川南方に浮かぶ島のひとつ、永代島と呼ばれていました。そこに、長盛上人<sup>ちがせい</sup>という人が寛永元年（1624）八幡宮を勧請したといわれています。

この神社を管理する寺（別当寺という）が永代寺でした。時代が下って貞享5年（1688）には立派な社殿が完成し、周辺町々の開発にも助けられて門前町が成立し、現在の繁華街にいたる基礎が作られました。

八幡宮が創建された頃は、今の永代通り付近がおおむね海岸線で、江戸港に入ってきた船は、隅田川をはさんで、西に靈巖寺（中央区霊岸島にあった大寺院で、明暦の大火後現在地に移転）、東に八幡宮を眺めながら、江戸にやってきた（帰ってきた）ことを実感したのです。

#### 5. 江戸市中から移転した木場

寛永18年（1641）、江戸は大火に見舞われました。いまだ、市中の町割りも完全でなかった江戸にとって、この大火は大きな衝撃でありまた幕府中枢に教訓を与えました。

火事が延焼した原因を探ると、市中に高く積まれた材木が被害を大きくしていたことがわかったのです。そのため、日本橋・神田周辺の材木商が材木置場を川向こうの深川に移転させたのです。

こうして、永代橋の東方、富岡八幡宮の北側に材木置場ができました。木場は、やがてさらに広い敷地と整備された掘割りを求めて東へと移転しますが、それまでは今の永代・佐賀・福住周辺が木場であり、ここをのちに「元木場」といいました。

#### 6. 明暦の大火と深川

江戸初期から開発を遂げてきた深川にとって、さらに大きな変貌をとげるきっかけとなったのが明暦3年（1657）におきた明暦の大火です。



「深川富岡八幡宮」（安藤広重・江都名所）

江戸はまた大きな試練に立たされました。その復興計画の柱に「本所深川の開発」があげられました。つまり、隅田川以東の都市化を急がれ、肥大化しつつある江戸の都市機能を担う地域となるように位置付けたのです。

そのため、万治2年（1659）には本所奉行が設置され、徳山五兵衛・山崎四郎左衛門があてられました。

本所奉行は、町奉行配下で本所低地の埋立て・掘割りの開削・架橋などがその業務でした。北十間川・大横川などの今も残っている掘割りはこの時期に開削されました。

また、万治3年（1660）に両国橋が架けられたのを皮切りに、元禄6年（1693）には新大橋、同11年（1698）には永代橋が架けられて江戸市中と本所・深川が近いものとなりました。

#### 関係略年表

天正18年(1590)	徳川家康、江戸に入り小名木川を開削。
慶長元年(1591)	深川八郎右衛門により深川村が開発・成立。深川神明宮創建。
寛永元年(1624)	富岡八幡宮創建。
寛永6年(1629)	深川獵師町が成立。
寛永18年(1641)	江戸で大火があり元木場が成立。
明暦3年(1657)	明暦の大火。
万治2年(1659)	本所深川の開発のため本所奉行を設置。
万治3年(1660)	両国橋架橋。
元禄6年(1693)	新大橋が架橋され、同11年(1698)には永代橋が架けられる。